

『変身』 フランツ・カフカ

翻訳：原田義人
はらだよしと

ある朝、グレゴール・ザムザが気がか
りな夢から目ざめたとき、自分がベッド
の上で一匹の巨大な毒虫に変わってしま
っているのに気づいた。彼は甲殻こうかくのよう
に固い背中を下にして横たわり、頭を少
し上げると、何本もの弓形のすじにわか
れてこんもりと盛り上がっている自分
の茶色の腹が見えた。腹の盛り上がりの
上には、かけぶとんがすっかり落ち

そうになって、まだやつともちこたえていた。ふだんの大きさに比べると情けないくらいかぼそいたくさんの足が自分の目の前にしょんぼりと光っていた。

「おれはどうしたのだろう？」と、彼は思った。夢ではなかった。自分の部屋、少し小さすぎるがまともな部屋が、よく知っている四つの壁のあいだにあった。テーブルの上には布地の見本が包みをといて広げられていたが——ザムザは旅廻りのセールスマンだった——、そのテーブルの上方の壁には写真がかかっ

ている。それは彼がついさきごろあるグ
ラフ雑誌から切り取り、きれいな金ぶち
の額に入れたものだった。写っているの
は一人の婦人で、毛皮の帽子と毛皮のえ
り巻とをつけ、身体をきちんと起ひじし、
肘ひじまですっぽり隠れてしまふ重そうな
毛皮のマフを、見る者のほうに向ってか
かけていた。

グレゴールの視線はつぎに窓へ向け
られた。陰鬱いんうつな天気は——雨だれが窓わ
くのブリキを打っている音が聞こえた
——彼をすっかり憂鬱にした。「もう少

し眠りつづけて、ばかばかしいことはみんな忘れてしまったら、どうだろう」と、考えたが、全然そうはいかなかった。というのは、彼は右下で眠る習慣だったが、この今の状態ではそういう姿勢を取ることはできない。いくら力をこめて右下になろうとしても、いつでも仰向けあおむの姿勢にもどってしまうのだ。百回もそれを試み、両眼を閉じて自分のもぞもぞ動いているたくさんの脚を見ないでもすむようにしていたが、わき腹にこれまでまだ感じたことのないような軽い鈍痛を

感じ始めたときに、やっとそんなことをやるのはやめた。

「ああ、なんという骨の折れる職業をおれは選んでしまったんだろう」と、彼は思った。「毎日、毎日、旅に出ているのだ。

自分の土地での本来の商売におけるよりも、商売上の神経の疲れはずっと大きいし、その上、旅の苦労というものがかかっている。汽車の乗換え連絡、不規則で粗末な食事、たえず相手が変わって長つづきせず、けっして心からうちとけ合うようなことのない人づき合い。まったく

いまましいことだ！」彼は腹の上に軽
いかゆみを感じ、頭をもつとよくもたげ
ることができるよう仰向けのまま身
体をゆっくりとベッドの柱のほうへず
らせ、身体のかゆい場所を見つけた。そ
の場所は小さな白い斑点だけに被われ
ていて、その斑点が何であるのか判断を
下すことはできなかった。そこで、一本
の脚でその場所にさわろうとしたが、す
ぐに脚を引っこめた。さわったら、身体
に寒気がしたのだ。

★テキストは、インターネット上の「青空文庫」のテキストを
もとにしています（一部加工しています）。